2532245

矢代静一

# 恋風浮世絵曼荼羅

（のかぜうきよえまんだら）

矢代静一（やしろせいいち）
一九二七年東京銀座生まれ。早稲田大学仏文科卒業。劇作家。十八歳の時から演劇界で活躍を続ける。
主な作品に、『絵姿女房』『黒の悲劇』『夜明けに消えた』『写楽考』（読売文学賞）『北斎漫画』『淫乱斎英泉』がある。
浮世絵師三部作で、芸術選奨＝文部大臣賞受賞。

恋風浮世絵曼荼羅（こいのかぜうきよえまんだら）　定価　一、三〇〇円
発行日　一九八〇年六月十六日　初版第一刷

著者　矢代静一

発行者　下中邦彦

発行所　株式会社平凡社
東京都千代田区四番町四の一
郵便番号　一〇二
電話　東京（〇三）二六五―〇四五一
振替　東京八―二九六三九

印刷所　図書印刷株式会社

製本所　株式会社石津製本所

© 矢代静一　1980　Printed in Japan
落丁・乱丁本のお取替えは直接本社サービス課までお送り下さい（送料は小社で負担します）

# 目次

第一章　北斎お栄英泉、大春画に挑む事　七
一、嘉永元年　二、嘉永元年つづき　三、幕間(アントラクト)・尾崎久弥『浮世絵と美人画』　四、文化三年（お栄二十七歳、英泉十六歳、北斎四十七歳、馬琴四十歳）　五、幕間(アントラクト)・瀬木慎一『謎の近世画家』　六、文化四年　七、文化四年つづき　八、文化四年つづきのつづき
第二章　お栄英泉が契る事　八九
一、文化七年　二、幕間(アントラクト)・楽屋話　三、文化七年つづき
第三章　お栄亭主淫乱斎
恋の鞘当ての事　一五一
一、文化十二年（英泉二十五歳、お栄三十六歳、北斎五

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

十六歳、馬琴四十九歳、吉之助四十五歳）　二、幕間・渓斎英泉自伝『旡名翁随筆・天保四年刊』　三、文化十二年つづき　四、幕間・林美一『艶本研究・お栄と英泉』

第四章　お栄お辰、淫乱斎の死を看取る事　二〇七

一、文政十二年（英泉三十九歳、お栄五十歳、北斎七十歳、馬琴六十三歳、お辰十八歳）　二、幕間・永井荷風『江戸芸術論』　三、天保元年　四、幕間・丸谷才一『北斎私見』　五、嘉永元年（英泉五十八歳、お栄六十九歳、北斎八十九歳、馬琴八十二歳、お辰三十七歳）　六、嘉永元年つづき

装幀＝スタジオ・ギブ

# 恋風浮世絵曼荼羅(こいのかぜうきよえまんだら)

# 第一章　北斎お栄英泉、大春画に挑む事

＊嘉永元年

一

色とれる五色の雲に法の道
　こころにかかるくまとりもなし

できた。俺の辞世にしては、少々野暮ったいが、まあまあの出来ってことにしておこうぜ。もっとも昔の俺を知ってる奴等が見たら、この悟りすました辞世が、あの淫乱斎英泉のかって、ぷっと吹き出すだろうな。けど知っちゃいねえ、奴等が見るときは、もう俺はこの世をおさらばして、極楽に鎮座ましましてるんだから。

辞世っていやァ、十返舎一九の辞世には吹いたね、

　この世をば、どりゃ、おいとまに、
　せん（線）香とともに
　ついには、はい（灰）左様なら



试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

長いこと「東海道中膝栗毛」なんて駄本書いてたんで、とうとう、他ならぬ作者自身が、弥次さん喜多さんそっくりになっちまいやがった。そういやァ、滝沢馬琴も両の目見えなくなっちまって、字が書けないんでよォ、がくっときちまって、辞世を書きやがった。

　世の中の厄をのがれて　もとのまま
　　かえすは　あめとつちの人形

あいかわらず気取った野郎だ、奴の読本は正直言って、「南総里見八犬伝」を書いた三十年ぐらい前でおしまいになってらァな。あとは惰性で書いてただけじゃねえか。奴はもっと早くたばった方がしあわせだった。けど、ほんとに、みなさんよく死にやがる。俺のまわりから、一人、二人、三人と、まるで櫛の歯がこぼれ落ちるように消えて行く。世の中もだんだん、いやァな物騒な世の中になってきたし、まったく生きてたって面白いことはなにもありゃしねえ。こないだも、やれ、メリケンの軍艦が浦賀にきた、やれオランダの軍艦が長崎にきた、さあ、開国だ鎖国だ、ドカンドカンと大砲ぶっぱなせと大騒ぎだった。もっとも、もうすこし若かったら、俺だって野次馬根性出して、ドカン、ドカンと一発二発面白がってやったかも知れねえが、五十八にもなっちまったんだから、もうだめだ。おまけに労咳なんて粋な病いにかかっちまってちゃな。

やい、こら！　赤目！　お前って奴は、何度言ったら分るんだ！　また、畳おもて噛じりやがって。おや、まあ、殊勝にうなだれやがって。いいよ、いいよ、勘弁してやるよ。なんたっ

て、いまの俺には、話相手ときたら、お前一人……じゃねえ、お前一匹しかいねえんだもんな。さ、こっち来い、爪切ってやるから。へッ！　跳んできやがった。不思議だねえ、摩訶不思議だねえ、赤目ちゃん、どうして、お前ちゃんは、兎のくせして俺という人間様の言葉が分るの。赤目ちゃんは、ひょっとしたら、妖術使いじゃないのかしら、兎に化けてるのは、世をしのぶ仮の姿で。おっと、ぶるぶるぶるんと身震いなさったね。さては、畳おもて食いすぎたんで、糞か小便。じゃ小屋に戻って、ゆっくりしておいで。けど、よくも畳おもてを食い荒したものだ。それも隅の方からきちんと。赤目は飼主の俺に似ず几帳面なんだな。ま、食いたいだけ食え、畳がすり切れ放題の方が、いっそこのぼろ家にはふさわしいやね。さ、もう、やめようぜ、一人でぶつぶつぶつぶつ、らちもないおしゃべりをするのは。誰かが天井の節穴から、有様のぞいてるかも知れねえぞ。外はうららかな上天気だっていうのに、真昼間から雨戸閉めきって、兎といちゃついてる爺いの図なんて、みられたもんじゃねえ。ああ、あの天下の浮世絵師淫乱斎英泉もすっかり孤独におなんなさったなんて、陰口きかれるのが関の山だ。ことわっとくがな、俺は孤独じゃねえぞ、孤独なんて、なんか滑稽でみっともなくて、大嫌いだ。おっと、そう威張りなさんな、俺のことを天下の浮世絵師だなんて思っている奴は、英泉、いまじゃ誰もいないんだよ。考えてみりゃ、絵筆捨ててから、もうかれこれ十年になる。だから、英泉よ、お前なんかもう、そろそろ忘れられた存在なんだよ、生きてるうちから忘れられちまってるんだから、いわんや後世においてをやだ。ま、後世にまで間違いなく残る浮世

絵師といったら、さしずめ、そう、間違いなく、浅草は聖天町にお住いの、三浦屋八右衛門だろう。畜生！　あの野郎、八十九にもなったってのに、まだぴんぴんしてやがる。なに、八右衛門とは誰のことかって？　知らねえのも無理はねえな。気分を変えるんだって、ちょっと前に改名したばかりだから。北斎先生のことよ。俺は葛飾の土ん百姓の生れだ、だから、今日から百姓八右衛門と名乗るんだ！　って、ゆうべ山谷の八百善で鯛のかぶと焼を御馳走になったときおっしゃってたっけ。

やめろ！　やめろ！　北斎の爺いなんか思い出すのは！　あの爺いにめぐり合ったばっかりに、俺の一生は台なしに……。あ、いけねえ、妙に顔がほてってきた。こりゃひどい熱だ。おーい、赤目！　赤目ちゃん、早く来ておくれ。寒気がして仕様がねえんだよ、いっしょにおねんねしよう。お前ちゃんを抱いてると、体がほかほかしてきて、ぐっすり眠れるんだ。それにしても、お栄の野郎、おそいなァ。きっと見舞ってあげると、ゆうべ八百善で、指切りげんましたのによォ。お栄はおやじの北斎とちがって、まごころがあるもんなァ。そうだ、うまいものでもこしらえてるんだ。なァ、赤目、お栄はお前にもきっと、朝鮮人参の御馳走もってきてくれるぜ。

＊嘉永元年　つづき

## 二

五日ほど前に、日本橋坂本町にある英泉さんのお店に、白粉買いに行ったら、お店閉まっていました。どんよりとした雨雲がおおいかぶさっていて、まだお昼前だというのに、あたりは薄暗くて、店先に吊してある白粉『かおり香』の看板も、気のせいか、しなだれているように思えました。

私、なにか胸さわぎがしたので、裏に廻って、戸を叩き、「英泉さん、おいでですか」とそっと言いました。耳をすまして、中の様子をうかがっていましたら、力のない空咳が聞えました。英泉さんの声に間違いありません。そこで、もうすこし声をはって「英泉さん、お栄ですよ」返事がありません。「開けてくださいな」空咳が鳴るだけでした。雨がしとしと降ってきたので、私、あわてて蛇の目をさし、「英泉さん、いるんなら、返事しておくれ、年寄が雨の中、傘もささずに突っ立ってるんだよ、すこしは、かわいそうだと思っておくれな」ようやく返事が返ってきました。「お栄さんか。せっかくだが英泉は、もう、おっちんだよ」戸が開きました。英泉さんは、いたずらっぽい目で、私を見て、朗らかそうに笑いましたが、顔の色は、蒼白くて、死人のそれのようでした。あがらせてもらうと、座敷には万年床が敷かれてあ

り、その上を、赤目が鼻をぴくつかせながら、跳ねまわっていました。
「年寄、年寄って言いなさるが、お栄さん、いくつにおなりなさった」
「女に年をきくなんて、英泉さんも、やきが廻ったね。昔は、そんな野暮なことは言わなかったよ」
「ええと、俺より、たしか十一年上だったから、六十九か。六十九じゃ、お気の毒だが、あっちの方は、もう、おしまいだな」
「よけいなこと言うもんじゃないよ、あんただって、すっかりしょぼくれてるじゃないか」
「ばか言え、その気になりゃ、まだまだ、餓鬼の二人や三人こしらえられらあナ」
ぐっと私をにらみつけるのでした。昔は、英泉さんにそんな目でみつめられると、小町娘も芸者衆も、頬をぽうっと薄桃色に染めたもんだっけ、でも、いまはもうだめ。
「体でもこわしたのかい？」
「なに、ちょっとな」
「ちょっとじゃないみたいだよ、あんたの顔色みてると」
「とにかく、なにもかも、おっくうになっちまってな、それで、十日ほど前に店仕舞いした。店の若い衆に小女、飯炊きの婆さん、みんな暇をやったよ。そしたら、さばさばして、以前より、体の具合がよくなったぜ」
「『かおり香』やめちゃったら、明日っからでも、早速、おまんまの食いあげじゃないか」

「なに、なんとかならァな、これまでだって、なんとかなってきたんだから」
なにか、心にきめている感じでした。
「お栄さん、一人ぼっちてのは、じつにいいもんだぜ、うん、じつにいい」
ふっと、私、この人死ぬ気だと思いました。万年床の枕元には、店屋物の丼と割箸とふちの欠けた茶呑茶碗が、ちょうどいまの英泉さんのわびしい暮しを物語るように、それぞれ、そっぽを向いて散らかっていました。私は、ああ、この人に滋養があって、おいしいおいしいと舌鼓を打ってくれるようなものを御馳走してあげたいと思い、それで、ちゃんにたのんで、ゆうべ、八百善に三人して上ったのでした。
八百善は会席料理で評判のお店でしたが、英泉さんは、魚、それも鯛が好物なので、吸物は鯛のうしお、焼物は鯛のかぶと焼、そうそう、精がつくといって、鯉こくも注文しました。
「北斎先生、なんだかわるいね、こんなに御馳走になっちまって。俺はこのごろぴいぴいしてるんでね、こんな御大層な店には、ついぞあがったことはねえんだが、なんでも、茶漬と新香で一両二分もとるって噂ですぜ」
ちゃんは、それが癖の、苦虫を嚙みつぶしたような顔で、おいしいんだか、まずいんだか分らないような食べ方で、だまって箸を運びつづけるだけで、ろくすっぽ返事もしませんでした。
正直言って、私の家だって、内情は火の車なんです。ちゃんときたら、銭にならない絵ばかり描いてますから、私の春画の内職でほそぼそと暮しを立てている始末なのです。天下の葛飾



试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co